

イタリアの「熱い秋」

日ごと太陽が遠のき、冬の足音が急速にしのびよるイタリアの秋。田園地帯で、恵みを祝う収穫祭がにぎやかに催される一方、都市部では、もうひとつの風物詩デモやストライキが最盛期をむかえる。この抗議活動が「熱い秋」と表現される所以は……

都会暮らしと収穫祭

秋といえば、イタリアでも収穫の季節である。九月半ばを過ぎるとイタリア中はブドウの収穫とワイン作りで忙しくなる。都会暮らしの人も、週末、親戚や友人のブドウ園を手伝いに行ったり、キノコや栗などを採りに出かけたりする。最近では、これら秋の味覚に便乗したブドウ祭りやキノコ祭りなどの収穫祭も、楽しみのひとつになってきた。もちろん、これまでも収穫祭はあったが、近年、観光による地域振興という思惑のもと、各地でさまざまな収穫祭が競うように増えているからである。この時期、いまだ夏のバカンス気分が抜けないせいもあるか、週末ごとに近隣の町々を訪れ、田舎生活の一端に触れながら皆で飲食を楽しむという習慣が定着しつつある。

もうひとつの祭り

ところで、田舎から都市部に目を転ずると、イタリアの秋のもうひとつの風物詩は、デモやストライキである。日本では、「春闘」ということばがあるように、ストライキなどは春というイメージがあるだろう。しかしイタリアでは、次年度予算案が議論される秋が、抗議活動の最盛期になる。たしかにイタリアは一年を通してストなどが頻繁におこなわれる国だが、秋は格別なのだ。その熱気ゆえ、「熱い秋」という表現もなされる。

抗議活動の担い手も、日本のそれが労働者に偏りがちなのに比べると、学生、一般市民、移民など、じつに多様である。そもそも予算案の議論には、労働問題をはじめ、教育、社会福祉、移民政策など多岐にわたる政

策が含まれている。したがって、それぞれの問題の当事者が、政府案をめぐって意見や抗議の声を上げるべく、デモやストライキを計画するのである。さらに彼らの抗議は、プラカードを掲げてシユプレヒコールを上げるだけでなく、多分に娯楽的な要素があることも印象的だ。たとえばデモ行進中、彼らは歌ったり踊ったり、仮装したり、自分たちで作った政治家たちのハリボテ人形をもち出したりする。デモのために周辺各地から都市に集まり、皆でワイワイ盛り上がりながら行進をしている様子は、一種の祭りのようにも見える。

最大の「被害者」は

とはいえ、こうしたデモやストライキは、九月半ば以降は小規模なも

のも含めるとほぼ毎日のようにおこなわれ、人びとの生活、特に交通事情に支障をきたす。人びとの足を直撃する交通機関のストライキだけでなく、デモ行進も交通規制を伴うからである。大規模なデモは、たいていもつとも交通量の少ない日曜日の昼過ぎに実施されるが、その間は幹線道路が車両通行禁止になる。小規模なデモの場合は平日におこなわれ、通勤通学などに多少なりとも影響がある。交通規制やバス路線変更の情報は二・三日前には新聞等で公表されるものの、周知は難しい。このため、頻繁な「突然の」交通規制に、もともと評判の悪いイタリアの交通事情はさらに混乱する。そんななか、最大の「被害者」は観光でやってきた外国人だろう。わたしも、バス停でいくらまってもバスが来なかった

り、突然途中でバスを降ろされたりして、右往左往している観光客に何人も出くわした。

現代史の要

その一方で、イタリア人自身は、常日頃はそれほど忍耐強くないのに、この混乱はある程度受け入れているように見えるのは、ちょっと驚きだった。たしかに彼らは文句を言う。デモによる交通規制に引掛かったバスの車内では、運転手や乗客たちが、デモに対する不満を声高に口にしている光景もしばしば見かける。しかし、だからといってデモやストライキの規制を強化したり無くそうとしたりする方向には進まない。

その理由としては、彼らがこの状況に慣れて諦めているせいもあるだろうが、もうひとつ、こうした抗議活動が、イタリアの重要な歴史的記憶に密接につながっているからかもしれない。じつは「熱い秋」という表現も、一九六九年秋、トリノのファイアット工場での大規模ストライキを発端とする労働運動・学生運動を指し示す歴史的なことばである。前年の一九六八年フランスで起きた学生や労働者たちの運動はヨーロッパ中に（さらには日本にも）飛び火したが、イタリアでの運動は激しかっただけでなく、その後他の

国々以上に継続した。現在も、内実は大きく変容したにせよ系譜は途切れていない。「熱い秋」は、イタリア現代史の要のひとつであるとともに、彼ら・彼女ら一人一人の人生や考え方に深く根付いているともいえるだろう。わたしも、ごく普通の人たちが「熱い秋」の思い出を熱く語ったり、自分の子どもや孫たちがデモの準備をしていると「わたしたちもむかし、プラカードを作ったね」と笑いながら眺めたりしている場面にも何度か出くわしている。そしてイタリア人は、一般的に政治的な話題が好きで、自分たちの意見を表明し合うことを好む傾向があることもつけ加えておこう。近現代のイタリアを代表する思想家の一人グラムシは、「わが国では、叫んだり、議論に花を咲かせたり、自慢話をしたりする場として、広場が、他国に比較して著しく家庭より重要なのです」と述べている。広場、すなわち、外に出て皆で政治を論じ、デモなどの抗議活動をするのは、イタリアでは決して特別な行為ではなく、むしろ日常生活の一部であり延長線上なのである。とするならばイタリアでは、そうした風土と歴史的記憶に支えられ、今年も「熱い秋」がやってきているに違いない。もちろん、若干は楽しみのひとつとして……。



10月の某日曜日午後、ローマ中心街の幹線道路いっぱいにはひろがってデモ行進をする人びと(2009年)